

経済学がもっと面白くなる〈情報&メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報

【エコノ】

2020. 冬・春号

econ. No. 41

特集座談会

海外へ行ったからこそ、見えたもの・感じたこと

～英語圏以外の国で学ぶ、国を学ぶという体験～



連載column

From a Distance 13

徐涛先生 (4 ページ)

news 1 卒業研究中間報告会を開催

逸見宜義先生 (4 ページ)

news 2 Youth+ 豊平訪問

宮本章史先生 (6 ページ)

news 2 フロンティア講座開催

歌代崇史先生 (6 ページ)

news 2 経済学部プレゼン大会

逸見宜義先生 (6 ページ)

news 3 2019 年度 地域研修報告会

宇土至心先生 (8 ページ)

news 3 2部財政学Ⅱで特別講演会

野口剛先生 (8 ページ)

news 3 2020年就職活動が本格化

(8 ページ)



連載 interview

OB訪問—働きマン²⁴

澁谷政憲さん (5 ページ)

連載

研究室の窓から

牛久晴香先生 (7 ページ)

写真右「研究室の窓から」——西アフリカのガーナ、ボルガタンガ地方でつくられている手工芸品「ボルガ・バスケット」。近年、その製造が先進国の開発援助やフェアトレードにより産業として注目されている。



特集 海外へ行ったからこそ、見えた

～英語圏以外の国で学ぶ、国を学ぶという体験～

経済学部は、それぞれの土地の環境や文化と経済活動の結びつきを学ぶことに力を入れています。経済のグローバル化が進む今、実際に海外へ出て、より広く多様な視点で地域を見られるようになることは大変重要です。近年存在感を増す英語圏以外の国々で暮らした経験を持つ教員の方々に、海外へ行ったからこそ見えたものや感じたことを、語っていただきました。



実際に見た、 各国の等身大の姿

栗林 それぞれ行った国や期間を教えてください。

宮入 私は中国の瀋陽です。交換教員として2015年に遼寧大学、2017年に瀋陽農業大学で北海道農業論の講義を行い、それぞれ約半月ほど滞在しました。中国は考えていたイメージと違いましたね。瀋陽は、人々はとても自由で日本人に親しみを持っている。経済発展の変わり目にあり、郊外の農村にはガタガタ道で古い物が残っている一方、人口約1千万人という大都市になっています。小さい商店でも電子マネーが使えるなど、日本より電子マネー化が進んでいて驚きました。

平野 僕の専門はラテンアメリカ経済で、カストロが亡くなった2016年に1年間、在外研修としてキューバのハバナ大学経済学研究所に所属し、非農業系協同組合企業の調査を行いました。キューバは社会主義なので税金という考え方がありません。GDPは低いですが、国が最低限保証してくれるので、基本的にお金がかからずとても安く生活できます。また、街を走るクラシックカーが有名ですが、韓国メーカーの新車も増えてきています。

大貝 2018年9月から1年間、フランス北部のまち・ランスにあるランス大学で社会経済学系のREGARDSというラボに籍を置き研究を行っていました。11月くらい

から「ジレジョーヌ（黄色いベスト）運動」が盛んになり、SNSを介して国を挙げての運動になっていくのはすごいと思いましたね。日本との関係では、マンガが浸透していてMANGAというカテゴリーがあるのが衝撃的でした。書店にも日本で見ると同じマンガのフランス語版が普通にあって、「ドラえもん」「キャプテン翼」「ドラゴンボール」「ポケットモンスター」はみんな知っています。

暮らしの中で感じた日本との違い

徐 海外で暮らしてみても、日本のほうが良いと思ったのはどんなことでしょうか。

宮入 トイレかな。中国は生活や物価は日本とあまり変わりませんが、トイレだけはドアがなかったり…。慣れると開放感がありましたが（笑）。

大貝 日本は時間通りに物事が進むので計画が立てやすいです。フランスは、急にス

トライキになってバスが来なかったりと先が読めない。住環境のトラブルも、ガス漏れ・水漏れ・雨漏りが全部というのは日本ではあまりないと思う。でも、ランスは国内で最も所得水準が高いエリアで治安は良かったです。

平野 キューバで一番困ったのが水。超硬水なので石灰質が多くて、一度沸かして石灰を結晶化させないと胆石ができるから飲めない。しかも、僕が行った時は水道管を替える工事をしていて断水もあり、水の確保が大変でした。水を買う人もいますが、500mlで60円くらいと生活レベルからすると高いので、キューバ人はたまに買ってペットボトルを再利用しています。捨てようとする「もったいない！」と、おばあちゃんに怒られました（笑）。

大貝 フランスも硬水なので、髪を洗うとガシガシになる。コーヒーマーカーも結晶が詰まって壊れました。そのかわりペットボトルの水は安くて、1.5リットルで30セント（約30円）くらい。日本との違いが一番とまどったのはコンビニです。店は完全に日曜休みだし。

平野 キューバは国営という理由で24時間営業のちょっとしたスタンドが必ずありますが、中国は？

宮入 瀋陽に24時間営業のコンビニのような店はなかった。でも、夜遅くまでやっている商店があるし、土日休みでも不便とは感じませんでした。

徐 上海にはコンビニがたくさんありますよ。郊外にも日系や中華系のコンビニがあります。



●司会/中国社会経済論
徐清 教授



●発展途上国論
平野 研 教授



ボリビアの渋滞は日本車の列（平野先生）

もの・感じたこと



熱心に講義を聴いてくれた遼寧大学の学生さんたち（中国・宮入先生）



前ページ左内写真：クリスマスマーケットのお店（仏・大貝先生）
写真左上から、シャンパンメゾンでのもの（仏・大貝先生）、ジレ・ジョーヌ（黄色いベスト運動）のテレビ談義の写真（仏・大貝先生）、ラバスの渋滞は日本車の列（ボリビア・平野先生） 写真下左から、瀋陽の繁華街にて同僚の先生親子と（中国・宮入先生）、放課後に賑わう瀋陽農業大学近くの学生街（中国・宮入先生）、キューバの中庭と日差し（平野先生）

平野 瀋陽と上海、全然違う国みたいですね。

徐 中国と言っても、広い国なので一括りにできないほど多様なんです。

多様な社会と家族のあり方



●司会／哲学
栗林 広明 教授

栗林 では、家族のあり方はどうでしょう。日本は核家族化・少子化という状況ですが。

平野 キューバは、発展途上国にしては珍しく少子高齢化が進んでいます。一番大きな理由は、子育て世代が亡

命や出稼ぎで海外に出て行ってしまいます。教育はすべて無償なので子育てにお金はかかりませんが、夫が家族を残して亡命するなど家族形態が変わり、離婚率も非常に高くなりました。ただ、もともと結婚というスタイルにあまりこだわらず、血のつながらない家族関係もたくさんあります。また、国が生活基盤を支えているので女性の社会進出がとても進んでおり、子どもを多く持つことを望まない女性も増えています。

大貝 フランスも核家族のほうが割合としては高い。ただ、週末になると必ずおじいちゃん、おばあちゃんのところで過ごします。近年、出生率が回復している背景には、アロカシオン・ファミリアルという2

人以上の子どもがいる場合の家族手当が手厚いことがあります。そのお金を子育てに回せば、ほかのことにお金を使えるので国の経済が回るという側面もある。また、結婚しなくても法的に認められた制度があって、籍は入っていないことも多い。子どもに関しても、キューバと同じように関係は多様です。

宮入 中国は「一人っ子政策」が廃止されましたが、子どもに関する手当があまりなく、学費も上がっているの、まだ一人っ子が多いようです。都市部には地方の農村から出稼ぎに来た農民工が多くいて、子どもを都市部に定住させるため、教育にお金をかけて手厚く1人の子どもを育てていく。地方から人がどんどん出ていくという意味では、日本と同じ状況に向かっている部分があります。

海外で新しい価値観を手に入れよ！

栗林 一般的には若いうちに世界を見て視野を広げるのが重要と言われます。海外を知る皆さんは、学生に海外へ行くことを勧めますか？

宮入 中国の学生はとても勉強熱心。授業後は質問攻めにあいます。日本にもすごく興味があり、「外の世界をもっと知りたい」という気持ちが強いと感じました。英語だけでなく日本語も学んでいて、日本で働きたいという人もたくさんいます。今はインターネットやSNSでナマの情報を得ていると思い込んでいますが、実際は全然違う。学生には、入ってくる情報と自分の目で見るとは違う、ということを体験してほしいです。

大貝 フランスでは、簡単な文法

と簡単な動詞で意思を伝えられれば「言葉ができる」と言います。身振り手振りを交えながらも会話が成立すればOK。日本人は「完璧に話せなきゃダメだ」という意識を持ち過ぎかもしれません。あと、海外で結果を出すことが成功、みたいな風潮がありますが、行ったときの状況の中で自分は何ができるのか、できたのかを評価すればいいんじゃないかな。とにかく一度行ってみればいい。

宮入 確かに、もっと気軽に海外へ行っていきたいし、言葉の壁もすぐに乗り越えられるのかもしれないですね。私は通訳がいたので日本語で話していましたが、農村の調査は言葉ができなかったら無理だと実感しました。片言でも言葉が分かっていたら後悔しています。

大貝 僕は最初は言葉がわからなくて、「フランス語をやるために来たわけじゃないし」と思っていました。でも、単なる言い訳だと気付いて徹底的に勉強したら、苦手だった電話応対もできるようになった。経験の中で考え方やスタンスも変わってることが、自分自身の変化を通じてよく分かりました。おかげさまで、フランスの研究者と共同研究ができ、学会発表も行えました。

平野 僕は「何しに来たんだろう。帰ろうかな…」と、月を見上げた記憶があります。海外へ行くのは誰に強制されるものでもない。自分で計画を立てチャレンジして、自分なりの意味付けができるかどうか。そういう経験をしたら、社会に出たときと何かが違うはずですよ。

大貝 外へ出たら、今いる場所を客観視できますよね。北海道から出たこともないのに「北海道が一番好き」という学生が多いけれど、海外でも国内でもいい、まったく違う価値観に触れる中で、自分が何を感じ



お気に入りの町の風景（仏・大貝先生）

たのかを軸に物事を考えてほしいと思います。

平野 そう、自分の価値観を一度壊す！海外ではペットボトルのお茶だけでも価値観が変わります。飲んだら「甘い！」(笑)。そういう価値観の微妙なズレから、自分にとって何が大事かを考えればいい。大学時代は新しい価値観にチャレンジできる時間です。海外へ行くことが、最もわかりやすく簡単な自分探しにもなると思います。

栗林 海外へ行ったからこそ分かることばかりですね。ありがとうございました。

[以上敬称略]



左から、栗林広明先生、平野研先生、宮入隆先生、大貝健二先生、徐涛先生 (いずれも本学部教員)

From a Distance 13

「DIVERSITY」、 「DISTANCE」と北海道

● 徐 涛 [経済学部教授]

道内のインバウンド誘致の担当者から、「なぜ中国人は北海道が好きなのか」と聞かれたことがある。答えに相当戸惑った。

結局、私が見つけた答えは「DIVERSITY」である。広大な野性的な自然&繊細な文学的な雰囲気、ケーキ、チョコレートなどの洋菓子&ラーメン、懐石料理&ジビエ料理、銀色の冬の世界&色彩鮮やかなラベンダー畑…このような多様なシーンが楽しめる北海道が、魅力的である。

昨年、徐ゼミは、中国人来道観光客を相手に、日本人に対する印象を調査した。なんと100%の中国人が日本人に良い印象をもっていると答えた！「日本人には礼儀が

ある」、「日本人は真面目だ」など、高く評価してくれた。もちろん、ほとんどの北海道の方々には礼儀正しく、社会が成熟している。しかし、まれに歩きたばこ、吸い殻のポイ捨て、地下鉄で喧騒する乗客、ビジネスマナーを守らない公務員・会社員など、別の側面の「DIVERSITY」も一部存在する。わざわざ冊子まで作って中国人だけにマナーを指導する君らこそ大丈夫かと、恥ずかしく感じたこともある。

私は、北海学園大学のおかげで、日本では、最も長い時間を北海道で過ごした。せっかく自然豊かな北海道だから、家の庭にはたくさんの花木を植えて、畑まで作った。毎年、梅の花が咲き、ミニトマト、ズッキーニ、インゲン豆、枝豆、紅はるか、ブルーベリー、さくらんぼ、ほおずきなどが収穫できたとき、とりわけ紫アスパラが頭を出したのを見つけたとき、感無量であった。そのため、休日に土に向けて黙々と農作業するなかで、北海道の大地に抱擁

されたことを実感した。

Bette Midlerの名曲「From A Distance」を思い出す。そのなかに、「From a distance/ There is harmony and it echoes through the land」という美しい歌詞がある。「DIVERSITY」をもつ北海道こそ、グローバルな価値観を受容し、外国の資源を取り入れ、「外」と「内」の「DISTANCE」をなくす大地になれる。これこそ北海道に未来をもたらしす大道でもある。



強く豪華なルピナス @ わが庭

econ.News 1

1部ゼミナールⅢ 卒業研究中間報告会を開催



2018年度以降に入学した学生は4年次に卒業研究が待っています。卒業研究は、経済学部のカリキュラムポリシーにもあるように『少数人数教育による指導を通じて、主体的・創造的な研究能力や、他者との協力に基づく実践的な能力などを養う』という点において非常に重要です。この卒業研究の大きな流れの説明はecon. No.40 (2019年春夏号)を参照ください。さて2018年度以降入学生の卒業研究は21年度からとなりますが、既に今年度から卒業研究と同様の流れでの論文指導が仮始動しています。11月16日には中間報告会が実施されました。これはゼミの指導教員とは異なる教員に対して論文の進捗状況を報告する機会となります。学生にとっては論文執筆に向け、より高いモチベーションを生む機会となるはずです。もちろんこの記事をお読みのあなたがこれから卒業研究をスタートする立場であれば「何故にこんな面倒なことを…」と思っているかもしれません。ですが騙されたと思って取り組んでみましょう。自分がちゃんと調べたこと考えたことについて「意見をもらえる」、「同意してもらえる」、「相手の意見に反論できる」など、いずれもとてもスリリングな経験で、卒業研究提出に向けてもっと調べてみたいというモチベーションにつながるはずです。[逸見]



経済界で活躍している同窓生をつなぎ、ビジネスに直結するネットワークをつくりたかった。

澁谷 政憲さん
し ぶ や ま さ の り

日本カイロプラクティックドクター専門学院の事務局長としてスクール運営を担う、株式会社rakune常務の澁谷政憲さん。北海学園大学OB異業種ネットワークの発起人のひとりです。

◀カイロプラクティックの講義に使用する脊椎模型を手に

大学を休学して、1年間カナダを放浪

大学4年になる直前で休学し、アルバイトで貯めた100万円を持ってカナダに渡った澁谷さん。トロント、カムループス、バンフ、カルガリー、ジャスパー、ケベック、モントリオールなどをヒッチハイクやバスで移動し、ユースホステルに泊まりながら1年間放浪した経験を持つ。

「日本じゃなくても暮らせるという変な自信と、英会話が身につきました」

帰国後は大学に戻り、ゼミの恩師から「面白そうな企業」と聞いたテレビゲームの卸に就職。東京で営業を3年、

札幌に異動して1年勤務したところで辞表を出した。

「若くて生意気だったから、ずっと組織にいるより、いずれ個人で開業したいと考えた。ちょうど札幌にカイロプラクティックの夜間スクールができたので、働きながら知識と手技を学んで、整骨院に転職したんです」

中学校は運動部だったため、体の故障をケアする仕事には以前から興味があったという。整骨院に勤めて4年目、母校であるカイロのスクールの学院長から「業務を拡大したいから一緒にやらないか」と声がかかった。当時、直営治療院「ラクネ」の1号店がイオン平岡にオープンしたばかり。商業施設にリラクゼーションのテナントが出店するのは珍しかったため、人気が高まりつつあった。

スクールの1期生だった澁谷さんは「仲間と一緒に会社を大きくしていくのも面白そうだ」と決心。最初は店舗運営とスクール業務の両方を受け持っていたものの、直営治療院が8カ所に増えたこともあって途中からスクールの運営に専念。店舗で働くスタッフの養成に力を注いできた。

代替医療業界の底上げを目指して

カイロプラクティックは、背骨や骨盤を矯正することで体の不調を改善する治療術。本場



ヒッチハイク中。なかなか乗せてもらえず降り込む（写真左・澁谷さん）

アメリカでは6年制の大学で資格を取得しなければならない専門職だが、日本ではまだ資格制度は未整備である。スクールの卒業生を含め代替医療の分野で働く人の横のつながりをつくり業界を発展させようと、さまざまな民間スクールに働きかけ、一般社団法人代替療法師会の設立に尽力したのも澁谷さんだ。

「カイロだけではなく、整体、リフレクソロジー、アロマセラピーなど、さまざまな代替医療の分野で働く人たちが連携し、業界の底上げを図るのが目的です」

万が一の事態に備える賠償責任保険制度を創設したほか、セミナーなど勉強会を定期的に開催。技術の向上と働きやすい環境づくりを推し進めてきた。

「これから取り組みたいのは、スクールの授業の映像コンテンツ化です。通学はできないけれど学びたいという人に有料配信できる仕組みをつくりたい。同時に、全道各地で開業しているスクールの卒業生とのネットワークを活かし、ラクネと卒業生との更なるwin-winな関係構築を模索中です」

経済界で活躍するOBのネットワーク化

澁谷さんはこれまでさまざまな商談の席で、たくさんの北海学園大学の同窓生と出会ってきた。「卒業生が8万人もいて幅広い業界で活躍している。企業の要職に就いている人や経営者も多い。もっとビジネスに直結するような経済界のネットワークがあればいいのに」と長い間、思っていたという。

あるとき産業カウンセラー養成講座で出会った同窓生に、その思いを打ち明けたところ、大先輩のOBを集め、澁谷さんの構想を発表する場を設けてくれた。それをきっかけに2012年に発足したのが「北海学園大学OB異業種ネットワーク」である。

講演会、懇親会、ゴルフコンペ、夏のビー



ホームカミングデーでカイロ施術ボランティア（奥が澁谷さん）

ル会など親睦行事を定期的に開催しているほか、去年からは「ポケモンGO」をもじった「学園GO」という企画もスタート。さまざまな業界で活躍するOBを探して北海道経済界での学園OBのポジションを分かりやすく伝えるため現場に赴き交流を図る小規模なイベントも実施している。「メンバー同士の会話や交流が、新しいビジネスにつながったと聞くとうれいすよ」。それが、事務局を担う澁谷さんのモチベーションだ。

なによりも人とのご縁を大切に

澁谷さんはホームカミングデーでスクールの学生たちの実習を兼ねた「カイロ施術」のボランティア活動も続けている。若い頃は感じなかったが、ある程度キャリアを重ねた今は「北海道で働くうえで北海学園大学卒という経歴は、大きな強みになる」と実感しているそうだ。

「後輩にアドバイスできるようなことは特別なけれど、ひとつ伝えたとしたら、人とのつながりは大事にした方がいい、ということかな。自分一人の力なんて、たかが知れてるけど、力を合わせれば思いがけないパワーが出せますから」

運営するスクールはもちろん、代替医療の業界内や大学の同窓生のつながりの中で、人と人を引き合わせネットワークをつくってきた澁谷さん。豊かな人脈を築く力は、もしかしたら、大学時代の無茶で無謀なカナダの旅で培われたのではないだろうか。



profile

- 1969年 根室市生まれ
- 1988年 北海道根室高校卒業
- 1989年 本学経済学部経営学科入学
- 1992年 大学を休学し、1年間カナダを放浪
- 1994年 大学卒業後、テレビゲーム卸に就職
- 1998年 カイロプラクティックの技術を学び、整骨院に転職
- 2001年 株式会社rakuneに入社
- 2012年 北海学園大学OB異業種ネットワークの設立にあたり事務局長に着任

[平成 31 年 4 月 17 日] 宮本ゼミナール

Youth+ 豊平(札幌市豊平若者活動センター)を訪問

宮本ゼミ I では、若者支援について理解を深めるため、4月17日にYouth+ 豊平(札幌市豊平若者活動センター)を訪れました。当日は、札幌市若者支援施設の概要および若者支援の事業内容について、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の松本弘美氏および渡邊沙千氏よりお話を伺いました。同法人では、Youth+(若者活動センター)における自習スペースの設置やレクリエーションの企画など、幅広い若者との接点づくり・居場所づくりを実施しています。また、大学生もボランティアとして関わる中学生向けの学習支援事業など、具体的な事例についてもご紹介いただきました。

なおYouth+は札幌市内に5か所設置されていますが、同施設館長の鎌田亜希氏よりYouth+ 豊平の特色についてもご紹介いただきました。ここでは屋外にプチファームを備えており、「畑部」という名前で大学生ボランティアも交えた野菜の栽培などを行っています。施設訪問後、畑部の活動や学習支援事業への参加を決めた学生もあり、大変意義ある機会となりました。Youth+ 豊平は本学豊平キャンパスから距離も近く、ぜひ今後もボランティア活動などに興味のある学生は、気軽に訪れてほしいと思います。

[宮本]



[令和元年10月17日・12月] 経済学部1部・2部基礎ゼミナール

フロンティア講座が開催される

2019年度のフロンティア講座は1年生向けに基礎ゼミの時間を利用して行われました。1部2部共に経済学部を卒業された浜中裕之さん、腰越雅敬さんにお越しいただきご講演いただきました。

1部では浜中裕之さんが「社会をつくる働き方」というテーマで講演されました。浜中さんは現在、様々な大学と連携し、インターン・プログラムを提案しているNPO法人北海道エンブリッジの代表理事をされております。大学在学中にNPO法人を設立されたのですが、そこに至るまでの経験を具体的なエピソードを交えて詳しくお話しされました。また、今までに実施してきたインターン・プログラムの成果と意義についてもご説明がありました。「自分がやりたいことは何なのか考えて、何も出てこなかったら、それは経験が不足していると考えた方がいい。経験からしかやりたいことは出てこない。だから学生時代には、いろいろ体験して下さい。まずは人の役に立つことを体験してみたいかが

でしょうか。」との言葉が印象に残りました。

2部では、腰越雅敬さんが「遠まわりだった近道——42歳から教員を目指した人生」というテーマで講演されました。現在教師生活2年目を迎えた腰越さんは、アイスホッケー選手としてスポーツ実業団に入り、その後、企業勤務、個人事業経営を経て、高校時代に抱いたもう一つの目標である教師を目指して本学部2部に入学されました。こうした体験を踏まえて、腰越さんは、大学での学びの意義や、社会人になるにあたっての必要な心構えをお話しされました。[歌代]



10月17日、腰越雅敬さんによる講演

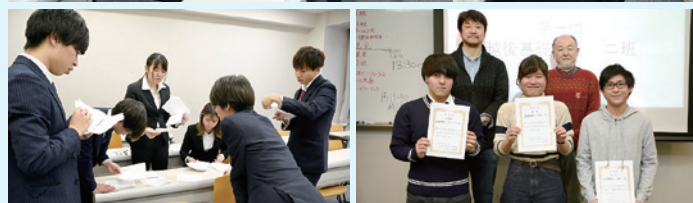


写真:プレゼン大会の様子(上)、採点集計中のゼミナール協議会学生(左)、表彰学生(右)

[令和元年12月15日] 経済学部ゼミナール協議会主催

経済学部プレゼン大会が開催される

12月15日に、今年で11回目となる「学内プレゼン大会」が開催されました。経済学部では、新入生のほぼ全員が基礎ゼミナールを履修しており、「ノートの取り方」「レポートの書き方」「新聞記事の活用」「ディベート」「プレゼンテーションの仕方」といった大学での学修に欠かせないアカデミックスキルを学びます。「学内プレゼン大会」は1年生にとってはこれらの成果を実践で試す非常に貴重な機会となっています。

特筆すべきは、新入生にとって貴重なこの機会を学生が生み出しているという点です。「学内プレゼン大会」は経済学部ゼミナール協議会が主催し、学生主体で運営されています。「こんなこととしてほしい」ではなく「こんなこととして行きましょう!」という学生発の活動が増えていけば大学生活はもっと楽しくなるはずです。[逸見]

研究室の窓から



ガーナのフィールドから グローバル化時代の世界の課題を考える

ボルガ・
バスケット▶

牛久 晴香 経済学部講師
うしく はるか

[専門はアフリカ地域研究、文化人類学]
栃木県出身。博士(地域研究) 京都大学。長崎大学多
文化社会学部フィールドワークコーチングフェロー、
早稲田大学社会科学部助教、同講師(任期付)を経て
2019年4月本学に赴任。

● 近著に『ガーナ北東部の輸出向け手芸品取引における契約履行—仲介業者と生産者のあいだの「コントラクト」に着目して』
(『アジア・アフリカ地域研究』16(1):38-72, 2016年)、『かごバッグの村—ガーナの地場産業と世界とのつながり』(昭和堂、
2020年3月刊行予定)



大きなバオバブの木の下で、おしゃべり
を楽しみながらバスケットを編む

アフリカの毒

わたしは2009年から西アフリカのガーナで研究を行っています。ガーナに興味をもったきっかけは、アフリカの貧困や世界の不平等のニュースでした。わたしが大学生だった2000年代後半は「ミレニアム開発目標(MDGs)」の達成が目指されていた時代で、世界が一丸となって貧困や不平等の問題を解決しようという機運が高まっていました。同じ時代に生きていながら、日本に生まれた自分は大学に通っておしゃれを楽しみ、好きなものを飲んだり食べたりしているのに、アフリカに生まれたテレビの中のあの子は生存ギリギリの毎日を送っている—そのような世界の状況に(今思えばナイーブな)疑問をもち、大学卒業後は大学院でアフリカの開発を専門的に学ぼうと考えました。わたしは英語しか話せなかったのに、英語圏で開発機関が活発に活動しており、当時のバイト仲間の出身国でもあったガーナの研究をしようと決めました。

かくして大学院に進学しましたが、わたしは所属していた大学院には、開発理念に内在する「先進国」的な考え方に批判的な雰囲気がありました。そして、地域独自の論理を知ることが必要だという認識のもと、その地域で生活しながら総合的に現象を理解しようとする、フィールドワークという手法が重視されていました。わたしもその考えにすっかり感化されてフィールドワークに行くことになりましたが、その方法を手取り足取り教えてくれる先生や先輩はいません。「とりあえず現場に行ってみろ」、「言葉が話せないうちは見ろ、数えろ」、以上。

幸いにも、わたしはガーナのある村の一般家庭に住まわせてもらうことになったのですが、はじめてのフィールドワークは失敗だらけで、何を見て、数えていいかわかりませんでした。日々の生活でも心を悩ませました。会った約束を反故にされる、質問に答えてもらえない、予想外のトラブルで計画がとん挫する……。『何もかもうまくいかない、もう日本に帰りたい』と日々思っていました。しかし、日

本に帰国すると辛かったことや悩んだことはすっかり忘れてしまって、「ああ、心が生き返った。早くガーナに戻りたい」と思ったのです。アフリカニストは、この現象を「アフリカの毒にあたった」と表現します。かくしてわたしも毒にあたり、大学院生の頃に計18ヶ月、それ以降もほぼ毎年1ヶ月間は、ガーナのボルガタンガ地方という地域に通いつづけています。

卒点としての「かごバッグ」

ボルガタンガ地方を知るための切り口として、わたしは同地で作られる「かごバッグ」に着目しました。その名を「ボルガ・バスケット」と言います。当初は農業の研究をするつもりでしたが、いつのまにかボルガ・バスケットのことばかり調べるようになっていました。この村ではみなかごバスケットを編んでいて、欧米や日本の開発援助機関や企業もバスケットをめぐってやってきていることに気づいたからです。ボルガ・バスケットがさまざまな人や事物、情報を交わらせる、この地域の「卒点」だと思ったのです。

ボルガ・バスケット産業は、開発援助やフェアトレードといった、先進国の人びとの「善意」に支えられている部分があります。しかし、その善意は必ずしも地域社会に受け容れられるとは限りません。企業や開発機関がもたらす外来の考え方や事物、制度は、生産地のそれらとは異なるためです。しかし、ボルガ・バスケット産業には両者のずれや衝突を架橋するように動く「ミドルマン」という存在がいました。詳しくは拙著を読んでいただければ幸いです。わたしはかごバッグの研究をつうじてガーナ農村と国際社会(市場や開発)の関係、そして異文化の接触過程で生じる衝突を乗り越える方法を学びました。

ボルガ・バスケット産業をとりまく状況は常に変化しています。とくに国際市場が求めるデザインや色柄は毎年激しく変わります。最近、需要の変化に対応するべく創出される新しい技術とその普及の過程に興味をもっています。しばらくボルガ・バスケットから目が離せそうにありません。

参照点としての日本とガーナ

ボルガ・バスケットの事例もそうですが、グローバル化の進行によってこれまで以上に人やモノ、情報の行き来が盛んになっています。グローバル化は、多様性により寛容な社会を構築する契機となりえますが、摩擦や衝突、自文化中心主義を引き起こす原因となることもあります。多様な人びとの交わりを有意義なものにしていく第一歩として、一人ひとりが自分の「当たり前」を疑い、他者の「当たり前」を知ろうとする姿勢をもつことが重要になります。わたし自身は、ガーナのボルガタンガ社会という参照点を持つことによって、日本(先進国)的な考え方を相対化するきっかけを得ました。反対に、日本のよさを素直に受け止めることもできるようになり、異質な2つの社会の視点から現代世界を立体的にとらえられるようになったと感じています。

他社会で生活することが難しくても、他者の当たり前とその論理を知ることが、自分の当たり前を見直す助けになります。わたしが担当している「国際事情」の講義やゼミナールでは、アフリカで表面化しているグローバルな課題を学ぶだけでなく、アフリカの人びとの「当たり前」や物事への対処の仕方を紹介しています。就職に直接役立つ授業ではないかもしれませんが、グローバル化時代を生きるみなさんの基礎教養となるような授業をめざしています。

大学は知的刺激にあふれた場です。ふりかえれば、今のわたしの考えや行動に大きく影響しているのは大学(院)で得た知識や経験でした。みなさんもさまざまなことに興味を持ち、多くの考え方や知識を吸収してください。



ファイールドワーク中の「コマ」バスケットの仲買人の仕事の勉強(撮影:西宮奈緒美さん)

地域研修報告会が開催される

今年度の地域研修の総まとめに当たる地域研修報告会が2日間にわたり開催され、延べ25ゼミが研修成果の報告と質疑応答に臨みました。

地域研修は、2年次以降のゼミナール所属学生が履修する講義で、現地での研修を通して現実の生きた経済・社会を学ぶことを狙いとしています。

現地研修を意義あるものとするため、学生たちは、4月以降、調査テーマの設定、各種資料の収集・分析などの事前学習に取り組みます。そのうえで、夏休みを中心に数泊での現地研修を実施します。その後、報告会までの期間に、研修を通じて明らかになったことを、ゼミなどでの議論を通じてまとめてきました。

例年同様、今回の研修テーマも、フェアトレードの推進、再エネを活用した地域づくり、離島の振興、鳥獣被害問題、ローカルベンチャーによる地方創生、等バラエティに富んでいました。

報告は、それぞれのゼミが工夫を凝らして行っていました。例えば、事前学習と現地研修で得た膨大な知見を、テーマ設定との関連で適切にまとめあげ、「何のために現地に行ったのか」が明確に伝わってくる報告を行ったゼミがありました。一方、準備や報告の時間的制約から、現地での経験や得た情報から明らかになったことを、聴衆に十分に伝えることができないケースもあったかと思えます。とはいえ、いずれのゼミも適切な「問い」の設定を行い、それを全体で共有して研修に臨んでいることがわかりました。今回の貴重な経験は、今後の学修や社会生活にとって大きな糧となるものと思われます。[浅妻]



[令和元年 12月5日] 2部財政学Ⅱ

財政学Ⅱ 特別講演会開催

財政学の講義では、毎年、財務省北海道財務局に在籍されている本学卒業生から、国と地方の財政の現状を知り、どうするかを考えてもらう機会を設けています。本年度は、12月5日に理財部特別主計実地監査官の吉沢貢氏と理財部融資課調査官の梅津英樹氏を講師にお招きして開催いたしました。今回は、国と地方の厳しい財政状況が続く背景を、図表を用いて丁寧に解説していただき基礎知識を再確認した上で、新しい取り組みとして、予算編成シミュレーションに受講生は挑戦しました。時間の都合でシミュレーションの時間が十分取れなかった点は次年度の課題となりましたが、12月という予算編成と重なるタイミングもあり、受講生も財政の課題にどう立ち向かうのかを主体的に考える一つのきっかけになったと思います。このような機会を設けていただきました皆様に、感謝申し上げます。[野口]



写真：財務省北海道財務局理財部融資課調査官梅津英樹氏（左上）と同理財部特別主計実地監査官吉沢貢氏（右上・下）による講演

[令和2年 2月・3月] キャリア支援センター

2020年 就職活動が本格化

2020年2月の就職ガイダンスを経て、新4年生は、いよいよ就職活動が本格化します。3月1日から各企業の広報活動が解禁となります。

良好な就職状況が続いていますが、いざ就活に取り組んでみると、思うようにいかず、へこんでしまうこともあるかもしれません。困ったときには、キャリア支援センターを中心に強力なサポート体制を敷いています。安心して相談してください。息抜きにゼミの指導教員の研究室を訪問するのもよいと思います。公務員組は、先行する民間組の動きに気が焦るところですが、落ち着いて試験の準備を進めていきましょう。新3年生は、時期はまだちょっと早ですが、インターンシップの準備をしてはどうでしょうか。アルバイトでは経験のできない仕事の世界を垣間見ることができると思います。

内定をもらうことをゴールにするのではなく、仕事の広い世界を知る機会に位置づけて、就職活動に積極的に取り組んでもらえればと思います。くれぐれも体調には留意を。[川村]



写真：学内OB・OG訪問会「先輩から仕事のリアルを聴ける会」で六花亭製菓佐藤哲也社長、札幌エスタ店川上勇斗店長に聞く（左上・下）、第5回就職ガイダンス（右）、共に3年生